

この機関誌は、令和6年度小学校教科書の  
内容解説資料として、一般社団法人教科書協会  
「教科書発行者行動規範」に則っております。

教室の窓  
国語・書写版

令和6年度  
小学校

内容解説資料

# このはつり

2023年春 特別号

東京書籍の国語  
「読むこと」と  
教材  
特集!



小学校用  
「新編 新しい国語」  
「新編 新しい書写」  
の魅力を引き上げます!

### 特集①

「新編 新しい国語」文学・説明文教材 作者・筆者からのメッセージ 2  
文学:戸森しるこ・安東みきえ・中澤晶子 説明文:松沢陽士・藤代裕之・保坂直紀

### 特集②

「読むこと」教材 全ラインナップ! ~文学・説明文~ 14

### 対談

国語を楽しむ! 「読むこと」教材から「言葉の力」を身につけるために 18  
藤田伸一×弥延浩史

### 書写のすすめ

なぜ、書写を学ぶの? 青山浩之の特別授業 20



東京書籍

令和6年度  
小学校教科書  
特設サイト  
公開中!

## WEBならではのコンテンツで、 新教科書を徹底紹介!



教科書紹介60秒動画

QRコンテンツ紹介

学習者用デジタル教科書

資料ダウンロード

いつでもQ&A

お問い合わせフォーム

随時更新中!



### 新編 新しい国語

つなぐ。  
「言葉の力」が、新しい君へ。

### 新編 新しい書写

自分の字を好きになる。  
その「かぎ」を探しに行こう。



国語はここに  
アクセスしてね!



コトハ



コウゾ

書写はここに  
アクセスしてね!



このはつり 2023年春特別号  
2023年4月発行  
発行者 渡辺能理夫  
発行所 東京書籍株式会社  
印刷・製本 株式会社リーブルテック

表紙絵・おとないちあき

今号の「このはつり」  
に関して、ご意見・ご感想を  
お聞かせ下さい。



本社 〒114-8524 東京都北区堀船 2-17-1 Tel:03-5390-7464(国語編集部) Fax:03-5390-7350  
支社・出張所 札幌 011-562-5721 仙台 022-297-2666 東京 03-5390-7467 金沢 076-222-7581 名古屋 052-950-2260  
大阪 06-6397-1350 広島 082-568-2577 福岡 092-771-1536 鹿児島 099-213-1770 那覇 098-834-8084  
ホームページ <https://www.tokyo-shoseki.co.jp>

先生のための教育情報サイト 東書Eネット <https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/>

# 「おにぎり石の伝説」(五年)

戸森しるこ

何の変哲もないものがなぜかブームになり、みんなが夢中になって集めてしまう。誰もそのような経験をしたことがあるのではないだろうか。「おにぎり石の伝説」では、クラスで突如起きたブームがきっかけで始まる騒動を描いています。作者の戸森さんに、この作品に込めた思いを教えてくださいました。



## Profile

1984年 埼玉県生まれ。作家。『ぼくたちのリアル』で第56回講談社児童文学新人賞を受賞し、デビュー。主な著書に『ゆかいな床井くん』『十一月のマーブル』(以上講談社)など。

## 「おにぎり石」の始まり

小学生の頃に、近所の子どもたちの間で、三角の石が流行したことがありました。どこでどのように手に入れたのかは覚えていませんが、いつのまにかみんなが持っていて……。そう、「おにぎり石」は実在したのです。

流行りものに疎いわたしも、その石を確か二つほど持っていて、お気に入りのお菓子の箱に入れて大切にしていました。何度も取り出して触っていたので、触り心地もよく覚えています。魅力的にすべすべでした。

小学生の教科書に物語を書くことに決まり、そんな三角の石のことをふと思い出しました。そういうことがあったなと、懐かしい気持ちになりました。そういった小さな記憶のかけらが、物語を書く時には大変役に立ちます。実物をもう一度見たいと思い、執筆期間中に実家へ帰ったタイミングで探してみたのですが、当時の宝物は残念ながら見つからず。残しておけばよかったなあと、がっかりしたのでした。

石のことをあれこれ考えているうちに、同じクラスのKくんのことをわたしは思い出しました。明るくて絵が上手で、みんなから親しまれていたKくん。石とセットで思い出したのは、Kくんがあの石をたくさん持っている場面をぼんやり覚えているからです。人気者だから石をたくさん持っていたのか、たくさん石を持っていたから人気者になったのか、それとも、人気者のKくんが持っていたからこそ、あの石は価値のあるものになったのか。たとえば彼の家の庭に、あの石が大量に転がっていたら、ちよつとおもしろいかも知れない。

現在のマイブームである「よもぎ蒸し」の最中に、にやにやしながらそんなことを



「この石、なんだかおにぎりみたい。」その一言がきっかけで、空前のおにぎり石ブームは始まった。

考えているうち、この物語は完成しました。

## 人間関係への向き合い方

ところで作中では、おにぎり石が原因でクラスにちよつとした上下関係が生まれ、微妙な雰囲気になっていきます。十年ほど前になるかと思いますが、「スクールカースト」という言葉を知った時に、なるほどと思いました。確かに学校という場所には、見えないけれど厳しい上下関係があったような気がします。今よりも経験不足で純粋で繊細だった分、傷つけられたことも傷つけたこともたくさんありました。例えばSNSのコメント欄を覗いてみれば分かることですが、大人

が暴言や差別やいじめを一向にやめられないのですから、子どもたちにそれをやめましようとは伝えるのも難しい話ではないでしょうか。大人になれば、嫌いな人や苦手な人とは、うまいこと距離を置くことができる自由が得られます。子どもの頃は、同じクラスにいれば避けることが難しく、「嫌いだから避けました」なんて言えばきつと問題になってしまふ。大人ができていないこと、つまり「全員で仲良し」というかなりハードルの高い目標を子どもたちに強要するなんて、わたしにはちよつと無理です。ですから、やめましよう、というお話を書くのはあまり好きではなくて、彼らなりの解決方法の部分を、物語の中心にしてみようと思いました。

現実には物語のようにはうまくいかないことを、書き手はよく知っています。その上で、ユーモアのある世界を楽しんでもらえたらいいなと思います。国語の時間のちよつとした息抜きに、おにぎり石をどうぞです。



おにぎり石のゲームを終わらせるには、強力なパワーアイテムが必要だった。ぼくたちのおにぎり石伝説は終了した。

## 編集部より

この教材では「人物の心情の変化を想像して音読すること」「言葉の力」として設定しています。人物の行動や会話から読み取った心情の変化をふまえながら音読します。

物語を読む子どもたちの教室には、「おにぎり石」のように集めたくなるものや、流行しているものはあるでしょうか。登場人物の気持ちを想像しながら、物語の世界を楽しんでいただけたらと思います。



どんな気持ちを表現するのかを考えて音読してほしいな。

# 「さなぎたちの教室」(六年)

安東みきえ

「さなぎたちの教室」の主人公・谷さんは、いっしょに生き物係をすることになった松田君や、持久走の練習でペアを組む高月さんと関わりの中で、自分の心の葛藤に向き合います。作者の安東さんに、この作品に込めた思いを教えてくださいました。

## 柔らかな鏡

目の中に異物が飛び込んでくることがある。痛いので目薬などで除くのだが、たまにそのゴミが痛みもなく、まばたきのたびに移動するのが見えることがある。そんな時、目の表面に涙の膜があることに気づかされる。涙の膜はまぶたと眼球とのあいだ、自分の内側と外側とを隔てる境界域にゆるりと張られているのだろう。

もしかしたらそれは、薄く透明な膜となって全身を覆ってはくれないだろうか。柔らかな鏡となつて外界から守ってはくれないだろうか。たとえばさなぎの殻のように。

そんなふうに想像をしたのがこの作品のはじまりだった。そして人にもさなぎの時代があるのではないかと思った。あるとしたら中学生になる少し前、小学校後半の頃だろう、と。

## もう一度戻りたいですか

「もう一度、子どもの頃に戻りたいですか？」という質問をされたことがある。思わず「いいえ」と答えた。小学校の教室の、あの椅子



### Profile

山梨県甲府市生まれ。作家。2018年、『満月の娘たち』で第56回野間児童文芸賞受賞。2022年、『夜叉神川』(以上講談社)で第62回日本児童文学者協会賞受賞。主な著書に『星につたえて』など。



クラス替えがあった。何人かの友達ができた。けれど、ときどきすうすと寒いような心持ちになる。



「目の玉ってさ——。」走りながら、わたしは言った。  
「水のまくにくるまれてるんだよね。」

にまた座ってみると言われたようで、尻込みをしてみましたのだ。

小学生の私が教室の椅子に座って考えていたのは、ここに居ない人になりたいたい、という思いだった。天狗の褌でも透明マントでもいい、誰からも自分の姿が見えなくなる覆いが欲しいと願っていたのだ。

授業がいやだったのだから、人間関係に弱っていた。もしもその当時しんどい

## やり直せるなら

すと、胸がぎゅつと縮むような気がしてくる。

あの頃の自分はどうすればよかったのか、今ならわかる。人はそれぞれ違うということに気づけばよかったのだ。つまらないと決めてかかった自分は傲慢だった。もっと新しい友人に近づこうとすればよかった。数少ないとはいえ、友だちと心が通いあった瞬間もあり、その時に味わった嬉しき、幸福感は今でも忘れられないのだから。

「もう一度、子どもの頃に戻りたいですか？」と、もし再び訊ねられたら「はい」と答えよう。自分を変えてやり直してみたい。世界を知る喜びに溢れ、きらきらと輝くような黄金の年代を、できるならあの時の級友たちと生き直してみたいのである。

という言葉を知っていたら、息を吐くように始終つぶやいていたと思う。私は転校生だった。山の麓の小さな学校から、市街の中心にある大きな学校に移っていた。うまく順応できず、以前の学校を思い出してばかりいた。それまで川でザリガニ釣りに興じていたのが、瀟洒な友人宅でのバービー人形遊びに放り込まれたのだ。遊びにも級友にもなじみず、つまらないと態度に出すことも少なくなかった。

環境が変われば遊び方も違ってくる。つきあい方のルールも違う。それが理解できなかった。次第にひとりでの時間が増えていったが、ひとりでも平気なフリをしていた。そのうち、級友どころか大人からも「変わった子」と言われるようになってしまった。その頃を思い出

## 編集部より

この教材では、「表現に着目して朗読する」ことを「言葉の力」として設定しています。情景描写と登場人物の心情を重ねながら、教材を読み取る力、読み取ったことを豊かに表現していく力を培ってほしいと考えました。

「さなぎたちの教室」という題名にどんな意味が込められているか考えることで、子どもたちが今の自分自身を見つめ直すきっかけにもなる教材です。

春を感じる表現がたくさんあるね。



# 「模型のまち」(六年)

なかざわ  
しょうこ  
中澤 晶子

日本で戦争や原爆を体験した人は年々少なくなり、多くの人は過去のことで想像するしかありません。「模型のまち」の主人公・亮にとっても、原爆は「自分には関係のない」「遠い昔のことでした。作者の中澤さんに、この作品に込めた思いを教えてくださいました。

## まちの過去と現在

物語の舞台となった広島は、デルタのまちです。市内を流れる川は六本。真水と海水がせめぎ合う汽水域には、魚たちが群れを成し、潮の香が漂います。一二〇万都市の川とは思えない、豊かな水の流れです。

このまちが人類初の核攻撃を受けた日から、およそ八〇年。いまでは、どんなに目を凝らしても、川の水面を埋め尽くしたという死者たちの姿を、思い浮かべることができません。様々な慰霊碑に刻まれた亡き人々の無言の声は、いまを生きる私たちに、届いているのでしょうか。

被爆者の平均年齢は、八四歳を超えました。修学旅行で広島を訪れる子どもたちに向け、命を削るように語りかける被爆証言者の姿も、年々減ってきて



原爆ドーム (写真は全て中澤さん撮影)

をつなぐ」という努力は、「繰り返さない責任」の、根幹を支えるものではないでしょうか。そのためには、まず知ること。知って、考えること。それを自然体で子どもたちに受け入れてもらうために、どのような方法があるのでしょうか。

## 体験と体感

体験者から伝えられた記憶を、私たちが継承しようとするとき、「様々な表現を通して」というルートが思い浮かびます。例えば、演劇、朗読、音楽、舞踏、美術制作などがそれにあたります。いずれも、身体を使つての表現です。声を出す。手を動かして物を作る。頭の中で考えるだけではなく、身体を通して「体感」する。それは、もしかすると、新しい「体験」なのかもしれません。

この作品の中で、亮は真由とともに、失われたまちの模型づくりに励みます。身体を使つてまちを再現することで、亮の心の奥底に潜んでいた、想像力のスイッチがオンになった、と私は思っています。

亮は八〇年前に生きた、かつちゃんと出会い、短い生の時間を共にします。ビー玉遊びに興じる亮は、その時代とまちを「体感」し、新しい「体験」をしたのではないのでしょうか。



広島平和記念資料館(原爆資料館)下の発掘調査現場(2016年)

広島に生きた人々の、一人一人の「物語」。それらを私たちは、どう語り継いでいけばよいのか。戦争の日々から遠く離れた今日の子どもたちに、いかにして。それが、この作品を書く上での「困難な課題」でした。

## 記憶をつなぐということ

私は、この物語の主人公・亮と同じく、転校生として広島のまちに降り立ちました。被爆二〇周年の広島は、まだ川岸にバラックが立ち並び、平和公園の木々も、いまほど鬱蒼としてはいませんでした。中学の友人たちは、被爆二世が多く、彼ら彼女ら、その家族を通して、私は広島というまちの根底を揺るがしたものの正体を感じていました。

もとより先の戦争を体験していない私たちに、戦争についての直接的な責任はありません。しかしながら、「同じことを二度と繰り返さない責任」は、私たちにも等しくあると思っています。体験の「記憶」を、私たちに書く遠因になったと私は思っています。

子どもたちが物語を通して、戦争の記憶を自分の日常に少しでも引きつけて考えることができますように。そしてそれが、世の中の動きに目を凝らすきっかけとなれば、これほどうれしいことはありません。



発掘調査で出土したガラス瓶など

## 編集部より

この教材では「表現の効果をとらえる」ことを「言葉の力」として設定しています。繰り返し出てくる表現や情景描写と、人物の心情を結びつけて考えることで、表現の効果をとらえる教材です。

主人公である亮の姿は、子どもたちにとって受け止められるでしょうか。子どもたちの心の中で生まれた変化を大切にしながら、読み味わっていただけたらうれしく思います。



自分の心に残る表現  
を見つけてほしいな。



# 「カミツキガメは悪者か」(三年)

まつざわ しょうじ  
松沢陽士

皆さんは「カミツキガメ」と聞いて、どんな生き物を思い浮かべるでしょうか。防除の対象となる外来種として有名なカミツキガメ。水棲生物のカメラマンである松沢陽士さんは、自分の家の近くにカミツキガメがいることを知り、撮影を始めます。カミツキガメとの撮影の日々を、松沢さんに教えていただきました。

## 身近にいたカミツキガメ

私がカミツキガメの撮影を本格的に始めたのは、二〇一四年のことです。自宅から車で五分くらいのもとも近い場所にいることを知り、通うようになりました。それ以前から、印旛沼や流入河川でカミツキガメが繁殖していることは、ニュース番組などで見て知っていました。しかし、まさか自宅近くの水田にまでいるとは思っていませんでした。こんなに身近な場所にもいるものなのかと驚いたものです。そしてさらに驚いたのは、その数の多さです。水田や周辺の浅い水路、そしてため池にも、行けば必ず見つかるくらいカミツキガメがいるのです。大きさもまちまちで、背甲長が三十センチ以上ある大きなものから、前年生まれの赤ちゃん亀までいます。同じような場所にはクサガメもよく見られますが、それよりも明らかに数が多いのです。とくにこの教材にも出てくる小さなため池は、カミツキガメにとつて暮らしやすいようでした。水深が二十センチ程度ととても浅いため、カミツキガメが日光浴のために明るいうちに出ていけば、その姿はまる見えで、多い日には一度に数匹が、池の中心付近に出ていました。

## 貴重な生態シーンをわずか半年で

池に通い始めてからひと月ほどした頃には交尾の様子を撮影することができました。野生の姿の写真だけでも珍しいと思っていたところに、このような貴重な生態シーンが撮れてしまったわけです。こうなると、もつと他の生態、例えば餌を食べている様子や産卵の様子なども撮りたいと思い始め、だんだんと欲が出てきました。ただ、交尾のように偶然撮れた写真と違って、捕食や産卵を狙って撮るとなると、とたんに難しくなりました。なぜならその頃の私は、カミツキガメの生態について知らないことばかりだったからです。まずは専門書を読んで生態について調べ、同時にカミツキガメの防除を行っている研究者にも話を聞きました。産卵期はいつか？ どのような場所に産卵するのか？ 何を食べているのか？ カミツキガメに関する知識をかたっぱしから取り入れました。そしてカミツキガメが出そうな場所を昼も夜も歩き回りました。その甲斐あって、カミツキガメがアメリカザリガニを食べている様子や、産卵の瞬間を撮ることができました。最終的には孵化まで撮影することができ、思いつく範囲の撮りたいシーンはわずか半年で撮影することができました。たったそれだけの期間でここまで撮れるとは私自身全く思っていなかったので、正直驚きましたが、その理由は何と言ってもたくさんカミツキガメがいたからでしょう。それを思うと複雑な気分でした。

## 生き物を飼う責任

現在は、撮影に通っていた水田周辺でカミツキガメを見つけることは難しくなっています。千葉県が行っている防除の成果が現れて

## カミツキガメの意外な姿

当時はカミツキガメの写真をインターネットや図鑑で探してみると、捕まえたものを地面に置いて撮られたものばかりでした。自然の中で暮らす野生の姿は全くといっていいくらいありません。これまでも撮影していなかったカミツキガメの野生の姿。最初はそれを撮れたのが嬉しくてたまりませんでした。観察していて意外だったのは、とても警戒心が強い生き物ということでした。ため池に近づくと、物音がしないように静かに歩いてはいたものの、カミツキガメはすぐに私の存在を察知して、岸のえぐれの下に一目散に逃げ込んでしまうのです。それからというもの、私はできる限りゆつくりと、木々の陰に隠れながら池に近づくようにしました。カメラを構えたり撮影位置を変えたりするのは、カミツキガメが顔を水に沈めたときに行い、水面から顔が出ているときに動かすのは、シャッターボタンを押す人差し指だけです。それはまるで、カミツキガメと「だるまさんがころんだ」をしているようでした。

いるのだと思います。カミツキガメは迫力のあるとても魅力的な亀ですが、やはり日本にはいけない生き物です。捕まえられたカミツキガメは最終的に冷凍して処分されます。可愛そうだなと思いますが、だからといって防除の手を緩めるわけにもいきません。そのような生き物を増やさないためにも、生き物を飼うときには責任を持って最後まで面倒を見る、そして野外には絶対に逃がさないということを広く知ってもらいたいと思っています。



捕まえられたカミツキガメ

## 編集部より

この教材は、三年生の説明文のうち、最後の「自分の考えを広げ、深める」系統に位置づいています。ボリユームのある文章ですが、これまでの学習を生かして要点を押さえることで、筆者の伝えたいことが浮かび上がってきます。

その名の通り凶暴なイメージのある「カミツキガメ」。教材文で描かれた姿から、子どもたちは、どんな考えを深めていけるでしょうか。

ペットを飼っている子どもたちもいると思うけど、考えられる教材だね。



# 「インターネットは冒険だ」(五年)

ふじしろ ひろゆき  
藤代裕之

情報化がますます進む社会において、子どもたちの周りにはさまざまな情報があふれています。学習のみならず、ふだんの生活の中でも活用するインターネット。そんなインターネット空間を「冒険」していくために必要なことは？ 筆者の藤代裕之さんに、改めてこの教材の意義を教えてくださいました。



## Profile

1973年生まれ。法政大学社会学部メディア社会学科教授・ジャーナリスト。著書に『ネットメディア覇権戦争 偽ニュースはなぜ生まれたか』(光文社)、編著に『フェイクニュースの生態系』(青弓社)など。

インターネットは私たちの生活にはなくてはならない存在だ。学校ではGIGAスクール構想によりインフラが急速に整備され、授業でネットを利用することも多くなっている。しかし、その利用に当たってただ心構えを説いたり、危険性を呼びかけたりするだけでは実態にそぐわないのは明らかだ。この教材「インターネットは冒険だ」では、ネットを使いこなすことを前提に、最低限学ぶべきスキルと、子どもたちに立ち止まり考えてもらう工夫を取り入れた。

## 誰もが発信者になる時代に

新しいアプリを使いこなし、ユーチューバーが人気職業になるほどネットが身近にある子どもたちのほうが、多くの大人よりもネットに詳しい状況にある中、教科書でネット利用を考えるとというテーマはなかなか扱いが難しいことが想像される。

そこで、教材文として、ある子どもがフェイクニュースの当事者として巻き込まれていくというストーリーが挿入される展開を採用した。自分のふとした発言が知らぬ間にネットに広がってしまう。まさ

か自分の発言が……と思うも、周りの友達もその情報を信じてしまうという筋立てだ。

これを読んだ子どもたちから「そんなことあるわけない」という反応があってもいい。マスメディアとソーシャルメディアの最大の違いは、誰もが発信者であることだが、自分や友達といった身近な人が発信者であるという自覚は驚くほど乏しい。まず、その認識を持つってもらうことがスタートラインとなる。

## ネット情報の三つの仕組み

次に、気軽に触れているネット情報の伝わり方には仕組みがあるということを理解してもらうために、「シェア(共有)」「お金儲け」「アログリズム」という三つの仕組みを紹介している。

ボタン一つでスマートフォンから情報をシェアできる仕組みと、悪意だけでなく善意や心配からでもシェアしてしまう人の心理を知ること、台風や地震などの災害時に間違った情報が広がりやすい要因を理解できるだろう。

また、お金儲けのために情報を広げている人たちがいることを知るのも大切だ。ユーチューバーが過激な行動で注目を集めることもあるが、これはアテンション・エコノミーと呼ばれているものだ。情報の正しさよりも面白さや過激さが収入につながるネットの仕組みを利用したもので、フェイクニュース拡散の要因でもある。

シェアや、コンピュータが一人一人に最適な情報を選ぶアルゴリズムの説明では、危険性だけでなく、その仕組みが便利さや快適さも提供していることに触れた。良い、悪いではなく、これらの仕組みを知ったうえで、ネットをどのように使うのかを考えてもらいたい。

注意してほしいのは、リテラシーを必要以上に強調してはいけないことだ。リテラシーはフェイクニュース対策の切り札のように言われているが、個人のスキルで偽・誤を見抜くことは困難だ。ロシアのウクライナ侵攻でゼレンスキー大統領に似せたAIの偽動画が広がったように、ネットは各国による情報戦の舞台となっている。もはや専門家以外に手に負えるものではない。

## 学習を広げる

この教材を読んで子どもたちに考えてほしいことは何か。それは、情報の出所がどこなのか、ネットを駆け巡る中で異なるものになっていないか、どのように自分や友達に関わっているのかという、情報やニュースの生態系の構造理解と関わりだ。教材に示した三つの仕組みを理解し、このことを考えられるようになれば冒険の準備は整う。これは食べ物で考えると分かりやすい。誰が作っているのか、売り場の管理は適切か。それがはつきりと分からないような食べ物を口にした

り、友達に食べさせたりしないはずだ。

出所は、ニュースであれば情報源が書かれているかを確認するとよい。ネットを使った調べ学習では、検索して出たサイトを記載するだけでなく、情報源を確認するようにすると学びを生かすことができる。情報の伝わり方の仕組みは、シェアは伝言ゲームで、お金儲けについては、ユーチューバーチームによる発信合戦をすることで楽しく学ぶこともできる。そのような関連学習が行えるような、ツールやワークショップも考えてみたい。

## 冒険を応援するために

教材タイトルにある「冒険」という言葉は、危険性はあるが、知的な好奇心を満たしてくれるというネットの現実を表している。子どもたちの冒険に大人がずっと付き添うことはできない。本教材が、子どもたちの冒険を応援する出発点になることを願っている。

## 編集部より

この教材は、五年生で出会う初めの説明的文章になります。四つの系統のうち、「読解の基礎」に位置づき、「要旨をとらえる」力を身につけることを目指します。説明文の読解の基本を押さえつつも、現代の子どもたちにとって避けては通れない「情報リテラシー」について考えることもできる教材。さまざまな学習展開の可能性を探っていただければ幸いです。

この教材で書かれていることは、大人にとっても大切なことだね。



# 「永遠のごみ」プラスチック（六年）

ほさかなおき  
保坂直紀

わたしたちの生活になくはならないプラスチック。しかし、そのプラスチックがもたらす問題が大きくなっています。単純に解決できるわけではない複雑さはらむ「プラスチックごみ」問題。この教材を通して子どもたちに考えてほしいことを、筆者の保坂直紀さんに教えていただきました。

## 情緒に流されることのないように

ウミガメの鼻に刺さったプラスチックストローを引き抜く動画が、二〇一五年ごろからネット上で広まりました。この衝撃映像が、いま海洋にプラスチックごみ問題が発生していることを社会に印象づけたことは確かでしょう。

このままでは、廃棄された漁網にウミガメやカニが絡まり、海鳥の胃袋はプラスチック片でいっぱいになってしまう。プラスチックは困りものだ。プラスチックを生活から一掃し、プラなし生活を目指そう――。

その気持ちはわかるのですが、はたしてそれでよいのでしょうか。とかく情緒に流されがちな環境問題を考えるとき、わたしが大切にしていることがあります。それは、「事実」と「バランス」です。

海洋のプラスチックごみ問題では、多くの科学者が研究を進めています。「こういう方法でこの対象を調べた」ことを明らかにし、その手順を踏めば誰がやってもそうなる客観的な結論を導く「科学」は、未知の領域にわたしたちが踏み込む際の「事実」を提供してくれます。

海にごみとして漂うプラスチックストローを減らしたいなら紙ストローを使えばよいし、地球環境の悪化を防ぎたいなら、紙よりプラスチックのほうがマシ。さあ、どうしますか。本来ならそう問いかけるべきかもしれませんが、この教材ではその部分は割愛し、プラスチックのリサイクルを進め、ごみの総量を減らす行動を呼びかけました。

もし可能なら、そうしたさまざまな見方があることにも、授業で触れてほしいと思います。子どもたちが成長して振り返ったとき、「あの国語の教材には、こういう見方が足りなかったな」と批判してくれればうれしい。そういう強靱な思考力を育てる踏み台になることができれば本望です。

## 「市民」になるために

さらに言うなら、「こうしたやっかいな問題は、君たちが自分事とし



海岸に打ち上げられるプラスチック

社会問題を考えるときわたしが科学を重視するのは、そのためです。この教材も、その方針で書きました。

## 思考力を育てる踏み台になりたい

子ども向けの文章の執筆には、大人向けとは違う難しさがあります。各論を併記して、判断は読者にお任せしますという書き方では、おそらく子どもたちは消化しきれない。子どもの成長段階に合わせた結論を書いておきたい。それは、微妙なニュアンスを泣く泣く削る作業でもあります。

最近、飲食店でプラスチックストローを紙ストローに替える動きがあります。一方で、「紙ストローはプラスチックストローより地球の環境に悪い」という研究論文もいくつか発表されています。原料の製造から運搬、製品化して使用、廃棄までをトータルで計算すると、地球温暖化や海洋の酸性化を進める二酸化炭素の排出、製造過程で使う薬剤による環境汚染などを総合的にみした場合、プラスチックストローは紙ストローよりはるかに環境に優しいというのです。

て考え、社会を舵取りして解決していかなければならないのだよ」というメッセージも子どもたちに伝えたいところです。教材では十分に触れることはできませんでしたが、「この地球に住む私たち一人一人が」「大人も子どももみんな考え、行動に移しましょう」という言葉に、その願いを込めました。自分が社会を構成する大切な一員であることを自覚する「シチズン（市民）」になってほしいということです。

小学校や中学校でこのテーマについて講演すると、子どもたちが意外なほど深く理解してくれることに驚きます。そもそも、プラスチックはきわめて有用な人類の発明品で、これなしで社会はうまく機能しないでしょう。なくせばすむという単純な問題ではありません。これが、さきほど述べた「バランス」です。

わたしたちは、これからプラスチックとどう付き合っていくのか。この教材が、子どもたちがこうした社会問題を考えていく契機になることを、切に願っています。

## 編集部より

この教材は、六年生の説明的文章になります。四つの系統のうち、「情報活用」に位置づけるものであり、系統の仕上げとして「複数の情報関係づける」力に迫ります。一つの文章を読むだけでは、この力を十分に身につけることはできません。この教材では本文テキストに加えて、プラスチックごみに関連する二つの資料を掲載。資料とテキストを往還的に解釈することで、「実の場」で生きる読解力を育てます。

単純に解決できない問題だからこそ、みんな考えなければならぬんだね。





1年  
とんことん 武鹿悦子 文  
おおきななぶ 内田莉莎子 文  
かいがら 森山京 文

1年 サラダでげんき 角野栄子 文  
病気のお母さんのためにサラダを作るうと奮闘するりっちゃん。そこに動物たちがやってきて、サラダに入れるおすすめの食材を教えてください。



1年 おとうとねずみチロ 森山京 文  
三匹のきょうだいねずみのところ、ある日、おばあちゃんから手紙が届きます。

1年 スイミー レオ・レオニ 文・絵 谷川俊太郎 訳  
声に出して読むと気持ちが盛り上がり、劇や紙芝居などでも楽しめる教材です。

2年 ニャーゴ 宮西達也 文・絵  
三匹の子ねずみたちは、大きな猫のたまもと桃を取り出かれます。子ねずみたちは、猫の「ニャーゴ」という声も怖がりません。

2年 かさこじぞう 岩崎京子 文  
昔話特有の表現に親しめることができます。

3年 モチモチの木 斎藤隆介 文  
豆太の成長に心が温かくなります。人物の性格を考えるのに適した教材です。

3年 ゆうすげ村の小さな旅館——ウサギのダイコン 茂市久美子 文  
小さな旅館を営むつばみさんを訪ねてきた美月は何者なのか。最後にその正体が明らかになります。

2年 風のうぶひんやさん 竹下文子 文  
風の自転車に乗ってやってきた郵便屋さんは、動物たちや虫たちのもとに手紙を届けます。

2年 お手紙 アーノルド・ローベル 文・絵 三木卓 訳  
子どもたちが大好きな、がまくんとかえるくんのお話。シリーズ読書につなげることができます。

3年 サーカスのライオン 川村たかし 文  
年取ったライオンのじんぎは、火の輪くぐりのときも元気がありません。そんなじんぎのもとに、男の子が会いにやってきました。

3年 すいせんのラッパ 工藤直子 文  
季節感があり、オノマトペを楽しみながら読むことのできる教材です。

2年 名前を見てちょうだい あまみきみこ 文  
風にさらわれた赤い帽子を追いかけて、えつちゃん動物たちに出会います。

3年 ワニのおじいさんのたから物 川崎洋 文  
ワニのおじいさんに出会ったおにの子は、地図を手に、宝物を探しにかけます。

4年

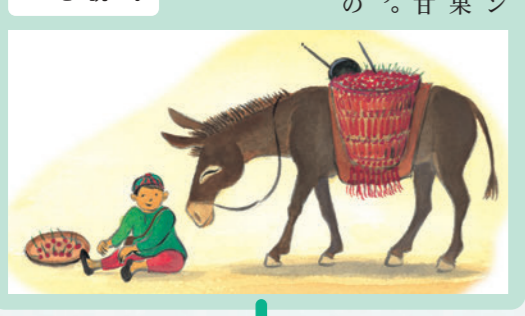
こわれた千の楽器 野呂昶 文  
倉庫で眠っていた壊れた楽器たちは、足りないところを補い合つて音楽を奏でます。

4年 走れ 村中季衣 文  
等身大の子どもたちの切ない気持ちを描いて、自分と対話することができるお話です。

4年 ごんぎつね 新美南吉 文  
味わい深い挿絵も魅力的です。これからの読み継いでほしい物語です。

4年 一つの花 今西祐行 文  
出征するお父さんの、「一つだけ」という言葉に込められた思いを考えます。

4年 世界一美しいぼくの村 小林豊 文・絵  
ヤモの住むバグマンの村は、夏になると果物がたくさん実り、甘い香りに包まれます。そんな村にも、戦争の影が迫っていました。



5年 注文の多い料理店 宮沢賢治 文  
二人の紳士は、山奥でたどり着いた西洋料理店で思いがけない目に遭います。



5年 世界でいちばんやかましい音 ベンジャミン・エルキン 文 松岡享子 訳  
やかましいことの大変な王子の変化を、子どもたちは楽しんで読んでいきます。

5年 大造じいさんとがん 椋嶋十 文  
がんの群れの頭領である残雪と、狩人の大造じいさんの戦いを描いた定番教材です。

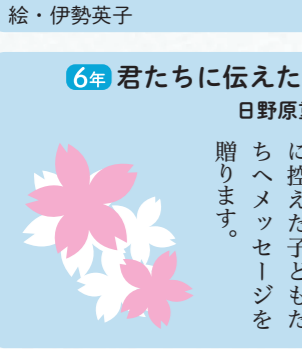
6年 海のいのち 立松和平 文  
六年生にふさわしい教材で、子どもたちは心を揺さぶられます。

6年 風切つばさ 木村裕一 文  
短い物語の中にも深い描写があり、心に響きます。心の葛藤や人物関係の変化について考えることのできる教材です。

5年 おにぎり石の伝説 戸森しるこ 文  
手塚治虫の漫画に親しんでいない子どもも多いですが、身近な漫画の歴史に関わる人としてぜひ知ってもらいたいです。

5年 手塚治虫 国松俊英 文  
手塚治虫の漫画に親しんでいない子どもも多いですが、身近な漫画の歴史に関わる人としてぜひ知ってもらいたいです。

6年 君たちに伝えたいこと 日野原重明 文  
日野原重明さんから、卒業を間近に控えた子どもたちへメッセージを贈ります。



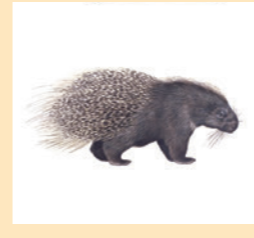




**1年 さとうとしお**  
砂糖と塩にはどんな違いがあるのでしょうか？身近な題材から説明文の扉を開きます。



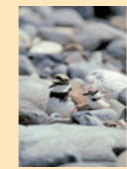
**1年 どうやってみをまもるのかな**  
ヤマアラシやアルマジロなど、動物たちのさまざまな「身の守り方」を読み解きます。



**1年 いろいろなふね**  
いろいろな船について、「役目」と「つくり」という観点から情報の関係性を読み解く教材。本格的な説明文学習の始まりに最適です。



**1年 子どもをまもる どうぶつたち**  
成島悦雄 文  
「命のつながり」について、一年生なりに見方、考え方を広げることができます。



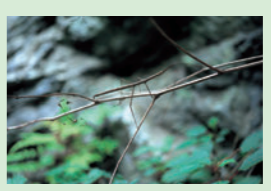
**2年 たんぽぽ**  
平山和子 文  
根や花、綿毛など、身近な「たんぽぽのひみつ」を見つけながら読むことができます。



**2年 どうぶつ園のかんばんとガイドブック**  
看板とガイドブックという二つの文章を比較することで、文章には状況や相手に応じたそれぞれの役割があることに気づくことができます。



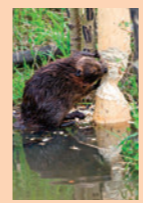
**3年 自然のかくし絵**  
矢島稔 文  
思わず引き込まれてしまう、保護色で身を隠す昆虫の不思議な生態。理科の学習が始まるこの時期に、ぴったりの内容です。



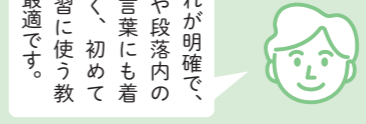
**2年 あなのやくわり**  
丹伊田弓子 文  
身の回りにある穴への見方や考え方を考え、認識を深める力を持つ教材です。



**2年 ビーバーの大工事**  
中川志郎 文  
ビーバーの驚くべき生態についてだけでなく、臨場感のある文章も魅力的な教材です。



**3年 せっちゃんざいの今と昔**  
早川典子 文  
身の回りで用いられている接着剤。社会の中での用途から昔の人々の工夫まで、接着剤をめぐるさまざまな話題が展開される新教材です。



**3年 「給食だより」を読みくらべよう**  
説明の仕方や表現の工夫を考える学習は、児童が書き手になったときにも生かせる内容です。



**3年 カミツキガメは悪者か**  
松沢陽士 文



**4年 ヤドカリとインゲンチャク**  
武田正倫 文  
ヤドカリはどうしてインゲンチャクを付けているのか？その疑問を筆者とともに読み解いていきます。



**4年 広告を読みくらべよう**  
見開きで大胆に配置された二つの広告を比較し、その表現の工夫を読み解いていきます。



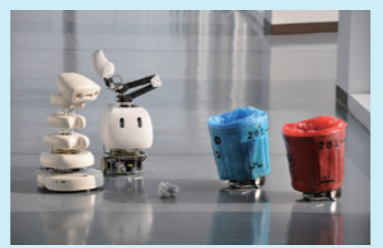
**4年 暮らしの中の和と洋**  
三年の要約学習のステップアップに最適。次の「書くこと」単元との接続もよく、効果的な学習が行えます。



**4年 数え方を生み出そう**  
飯田朝子 文  
何気なく使っている「数え方」に焦点を当てた文章。言葉について立ち止まって考えることができる教材です。



**5年 「弱いロボット」だからできること**  
岡田美智男 文  
従来のロボットのイメージとは反対の「弱いロボット」。そのロボットが教えてくれることは、何なのでしょうか。

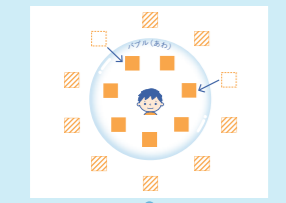


**5年 和の文化を受けつぐー和菓子をさぐる**  
中山圭子 文  
和菓子という題材について、教材文に加えて資料を読むことで、より深い解釈が求められます。



**5年 新聞記事を読み比べよう**  
同じ出来事についての二つの新聞記事は、その共通点・相違点が明確であり、高学年の読み比べに最適な教材です。

**5年 インターネットは冒険だ**  
藤代裕之 文  
「命の起源」まで、小学校最後の説明文単元にふさわしい、スケールの大きなテーマを扱った教材です。



**6年 イースター島にはなぜ森林がないのか**  
鷲谷いづみ 文  
イースター島の謎に引き込まれながら、筆者の主張と論の進め方を読み解いていきます。



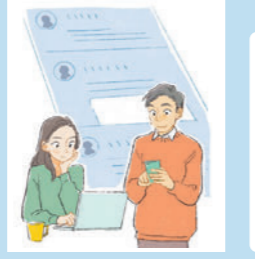
**6年 「永遠のごみ」プラスチック**  
保坂直紀 文  
「宇宙」に関わる三人のスペシャリストの文章から、科学技術や人類の希望あふれる未来を思い描くことのできる教材です。



**6年 宇宙への思い**  
油井亀美也/山立人/藪田ひかる 文  
身近な「食」の話題からロマンあふれる「生命の起源」まで、小学校最後の説明文単元にふさわしい、スケールの大きなテーマを扱った教材です。



**6年 インターネットの投稿を読み比べよう**  
投稿文の読解を通して説得の工夫を学ぶことで、実生活で生きる言葉の力を伸ばすことができます。





CONVERSATION

# 国語を楽しむ！

## 「読むこと」教材から 「言葉の力」を身につけるために

「国語の授業は難しい」  
「子どもたちがどんな力を身につけたのか実感しにくい」  
そのような声がよく聞かれます。  
今回の対談では、「新編 新しい国語」の編集委員である  
藤田先生と弥延先生をお迎えして、  
「読むこと」教材について、  
指導のヒントになるお話を伺いました。



弥延 浩史

筑波大学附属小学校教諭



藤田 伸一

川崎市立土橋小学校教諭

——初めての教材文を扱う際、お二人はどのようにアプローチするのでしょ。

弥延 私はず、一読者として教材文を読みます。人物関係図を書いたり、初読の感想を書いたり。その次に、どのように教材化していくかという視点で読みます。すると「中心人物の変容をとらえるときに、この表現に意味がある」とか、「この情景描写が大きいけど、クラスの子たちは読み落とすかもしれない」ということが見えてきます。そこを、子どもにとらえてもらうための方法を考えますね。実際の授業では、必ず初読の感想を聞いて、お互いの相違点を共有させて、子どもの反応を見ながら授業に入っていきます。

藤田 私は教材文の題名が持つ意味を考えます。例えば「自然のかくし絵」(三年上P42)。「かくし絵」って何だろう？と、興味をひく題名になっていますよね。ほかにも「イースター島にはなぜ森林がないのか」(六年P46)は、筆者が伝えたい内容が題名になっているのか、それとも要旨なのかということ想像してから教材文を読んでいくと、伝えたいメッセージはまた別のところにあることに気づく。題名に着目することには、そういうおもしろさがあります。

弥延 題名はだいじですね。五年生の「和の文化を受けつぐー和菓子とさくら」(P148)のように、副題がついている教材もあるじゃないですか。高学年の子どもだと、副題がついていることの意味を自分で考えることができる。そうすると、次に別の作品を読んだときに、自分だったらこういう副題をつける、という見方ができるようになる。副題は文章を正しく読み取っていないとつけられないし、「書く

系統もしっかりしているのが、東京書籍の「新しい国語」の大きな特徴ですね。

——教材どうしがつながることで学びが広がりますね。

弥延 「等身大の子どもの変容を描いた作品をもっと読ませたい」と思ったら、私はその後学ば教材と比較させたり、同じような話を読み聞かせしたりします。ほかにも、新美南吉(四年下P36)「ごんぎつね」や椋鳩十(五年P178)「大造じいさんとがん」の作品は、作家の作風が見えやすいし、授業の中で扱うのが難しくても読書に広げられる。いろんな本を手にとるときに、「前に読んだあの作品に似てるな」「あの作家さんの作品だから、今度読んでみようかな」というふうには、最終的に子どもの読みの世界を広げてあげたいなと思います。

藤田 学びを広げるという意味では、調べ学習でも自分が見つけた課題を解決するために、さまざまな資料や情報にあたります。そのときに、説明文で身につけた「言葉の力」を生かすことができる。国語で学習した力を、どのように他教科につなげていくのかも大切ですね。

——国語で身につけるべき力「言葉の力」を育てるにはどうしたらよいでしょう。

弥延 自分が何を学んだか自覚できるようにすることが重要ですね。文学教材で大切なのは、その作品から自分は何を強く受け取ったのかということ。さらに、ほかの作品を読むときにも使えるような読みの観点を獲得していく、その学びを自覚していくということだと思います。そうすると子どもたちは、「繰り返し言葉が出てくるのは何か意味がある」

こと」の表現にもつながってきます。学んだことはちゃんとつながって広がるということが、系統的に見えてくると、国語の授業、学び自体がおもしろくなりますね。

——子どもたちが教材に興味を持つために、導入や教科書を利用するうえで大切にすべきことは何でしょうか。

藤田 そうですね。子どもたちに教材文を読んでみたいと思わせることが、導入では非常に重要です。「自然のかくし絵」でも、まず、扉に大きな枝の写真があって、よくよく見ると、昆虫がいる。「何でこんなところに枝みたいな虫がいるんだろう？」と、わくわくするような気持ちで教材に向き合わせたいですね。そういう目で見ると、今回の教科書は、単元扉の大きな写真や挿絵がたいへん有効だと思います。てびきも、見開きで学習過程が非常に見やすく、だいじな部分を強調しながら作られているので、若手の先生にも使いやすいのではないのでしょうか。

弥延 私も同じ考えです。てびきはシンプルになって見やすくなった。授業の流れがイメージしやすいし、子どもたちにどのような「言葉の力」をつけていくのかよく分かる。これは一つの作品を教材化していくときに、よりどころになりますね。てびきの内容を生かして、先生がたの目の前の子どもたちに合わせて授業を展開していけばよいと思います。

——今回の教科書では、文学的文章にも説明的文章にも、新しい教材がたくさんありますね。

藤田 説明文でいえば、五年の第一教材「インターネットは冒険だ」(P44)は、メディアに関する教材です。筆者と編集委員会とで意見を交わしながら

「登場人物の行動は何かの伏線になっている」などといった見方・考え方ができるようになる。子どもたちの心を豊かにするための個々の読みを大切にしながら、読むときの着眼点を自覚できるように学習を振り返ることがだいじかなと思います。

藤田 これまでは、振り返りというところ、分かったことや感想をまとめることが多かった。しかし「学び方」を振り返ることが大切ですね。説明文も、自分はずなぜ要旨をとらえられたのか、どんな言葉に着目したことでとらえられたのか、どんな言葉に着目したことでとらえられたのか。それが題名だったり、繰り返し強調されているキーワードであったり、目の付けどころが分かることが、「言葉の力」の自覚化につながるのだと思います。

——最後に、全国の先生がたへメッセージをお願いします。

弥延 国語の授業にも、「分かった」「できた」瞬間が必ずあります。子どもたちに「読むこと」で楽しい」「国語の学びってこうつながっていくんだな」と思ってもらうために、まず先生がたに、教材といひ出会いをしてほしいですね。そのうえで、目の前の子どもたちにどんな「言葉の力」をつけていくのかということを考えていただきたいなと思います。

藤田 四年生に「ヤドカリとイソギンチャク」(上P42)という説明文があります。題名を突き詰めていくと、ヤドカリとイソギンチャクの共生関係が、助詞の「と」、たった一文字から見えてくるんです。言葉が持つ力が見えてくると、その奥にある素敵な世界に広がっていく。そういう目でぜひ、国語を見つめてもらいたいと思います。

書き下ろしていただきました。ネット社会を生きる子どもたちにぜひ読んで考えてもらいたいですね。ほかにも、SDGsを題材にした『永遠のこみ』(プラスチック)(六年P152)。現代社会のマイナスの側面をえぐり出しながら文章化しています。また、写真や資料も豊富です。身近な話題が紹介されているので、子どもたちも自分の考えを持ちやすいし、「じゃあどのようにこの局面を乗り越えていこうか」と、未来に向かって、クラスで対話しながら自分の考えを作り出していける教材になると思います。

弥延 文学は、「模範のまじ」(六年P126)といった、等身大の子どもを描いた作品が増えたのが今改訂の特徴の一つです。子どもたちにとっても親近感を持ちやすく、「自分だったらどうか」という感想を持つこともできる。こういった魅力的な作品が新しく加わったので、先生がたも一読者として、楽しく出会っていただきたいですね。

——「新編 新しい国語」では、従来より「教材の配列・系統」を重視しています。このことについて詳しくお聞かせください。

藤田 説明文の系統では、各学年の第一教材で、説明文を読むうえでの基礎的な力をつけるようになっていきます。そして、第二教材以降で、身につけた「言葉の力」を生かして、「あ、要旨はこれだな」と、前の学びにつなげて読んでいくことができます。今回は、第三・第四教材に、今まで以上に読み応えのある説明文がありますが、既習の単元で習得した力を活用して新たな学びを生み出すといった、学びの連続性がより強固になりました。

弥延 領域ごとの縦の系統も、同じ学年内での横の

なぜ、

書写を

学ぶの

?

特別号

# 書写のすすめ 青山浩之の特別授業

「新編 新しい書写」編集代表の青山先生が、小学校の子どもたちに書写の授業を行いました。授業の後、「なぜ、書写を学ぶの？」について子どもたちが考えます。



この日、子どもたちは、平仮名の成り立ちと、「あられ」という文字を書くことを通して「点画のつながり」について学ぶ授業を受けました。



平仮名の成り立ちを説明する青山先生



文字の輪郭とつながりを意識して、筆を立てて書くことが格好よく書けるようになりました。「つながりをよくする」こと。それを意識することで格好よく



最初に書いたときは「つながり」を意識して書けなかったため、バランスや文字の位置がばらばらでした。先生に教わり、「つながり」を意識して書く

ことで、バランスよく上手に書けました。

青山先生…そうだね。払いの先に次の文字の一目目があるんだ。意識して書けていたね。



になりました。

今まで「点画のつながり」について意識がなくて、文字と文字がばらばらでしたが、意識して書くことで、文字どうしがつながり、中心軸のずれもなくなりました。



です。

私は左利きなのですが、左利きのための書き方を教えていただき、整った字を書くことができました。形と点画、文字のつながりを意識できるようになってきたので、次は、バランスも意識して書きたいです。

青山先生…筆を使うと「払っている」ことがはっきり分かるし、しっかり払う動きをしないと整えて書くことができないね。左利きの人も、筆の傾きに気をつけながら、右利きの人と同じような動きで書くと、すごくよくなりますね。



うになりました。ただ、文字の大きさがばらばらになったことについては、これから気をつけたいと思います。

青山先生…払いの先に点があり、それぞれ気持ちがつ

ながっているね。皆さんの字にもはっきりと変化が見て取れます。

「つながりを意識する」という目標を持ち、大切にしたいところを意識できたこと。すごいことだね。その上で、さらに自分でも課題を見つけたんだね。

「つながり」から、今回の授業で目指したものがはっきりしましたね。では、この「つながり」って教科書のどこに書いてあるかな。



「書写のかぎ」

青山先生…そうだね。「書写のかぎ」が、今日学んだとても大事なポイントだということに、気づいたね。

青山先生…「字を形よく書きたいな」と思ったときに、「こんなとき、こうすれば整った文字を書ける」という「かぎ」を引き出しにいっぱい持っておくことは大切だね。

「かぎ」を意識して字を書くと、自信を持って書けるようになるね。

書写のかぎ

点画のつながり(文字と文字のつながり)

文字の終筆から、次の文字の始筆へ、空中でなめらかにつなげるような動きで書くと、字形が整いやすい。



左利きの指導を受けている様子

子どもたちからの質問があり、青山先生の字が上手な理由を聞かれています。

青山先生…皆さんは、上手な字は、どうしたら書けるようになると思いますか。



たくさん字を書いて、文字を書くコツを体に染みこませるのが一番だと思います。

青山先生…そうだね。先生も練習をたくさんしました。ただ、練習だけしていても上手になるとは限らないのです。「なぜだろう？」と考えを持つことが大切で、それは「見方」とか「考え方」って言うのだけれども、いつも「問い」を持ちながら練習するほうが、ただ体に覚えさせるより、数段、自分のものになると思うのです。

だから先生の強みはね、どこが正しいポイントなのか、「かぎ」を見つけられたことなんです。

皆さんも「かぎ」を探して、自分の引き出しをいっばいにするように、意識して練習してほしいと思います。



青山先生と子どもたちが、「書写を学ぶ意義」について考えます。  
青山先生…なぜ、書写を学ぶのかな？



字が整うための過程を、みんなで協力して探すことが大切で、それを学ぶためにあるのかな。



自分を整えるために必要なんじゃないかと思いました。学校生活に生かせるんじゃないかな。

青山先生…これからの皆さんの書写の学習が豊かになることを期待して、今日はここまでにしたいと思います。

全員…ありがとうございました。



青山先生…はい、ありがとうございました。先生、頑張ったかがあったなあ。



書写は、文字を書くことだけを勉強するのではなく、他教科にも役立つと考えました。今日学んだことは、文字を読みやすく書いたり、速く書いたりできるようにするためのコツだと思います。それでノートがきれいに書けると、見返したときに見やすくなると思います。

青山先生…皆さんは書写の学習を書写以外の教科でも生かすということに気づいたね。書写は何のためにあるかと質問すると、大半の人が「文字をきれいに書くため」と答えると思います。でも、皆さんが気づいた通り、考えて理解したり、「かぎ」を知って意識して書いたりすることがすごく大切です。そして、その字は日常のいろいろな場面で生きてきます。すぐくいだいな考え方に生き着いたね。



書写の学びについて話し合う子どもたち



ノートをとるときに生かしたい、読み手のために整った字を書きたい、もっと「書写のかぎ」を生かしたい。子どもたちは書写の学びの大切さにたくさん気づいてくれました。タブレットは学びの姿を変えます。でも、書写の大切さは変わりません。思いついたことをさっと書きつける。読みやすく書く。「手」で書くことの大切さは生活に息づいています。

書写の学びの豊かさを感じてくれたこと、私はとてもうれしかったです。

お読みいただいた先生方へ

「書写の学びの大切さを子どもたちへ」  
私たちはそんな願いを込めて、教科書を編集してきました。

実際に教科書を手にとっていただき、ご覧いただければ幸いです。

【参考】教科書紹介ホームページ

